

【論文提出者】 社会文化科学研究科 人間・社会科学専攻 フィールドリサーチ領域
呉 幸芬

【論文題目】

文焦点と韻律—台湾閩南語を中心として—

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、音節声調言語の中でも特に複雑な声調交替現象により知られる台湾語において、それぞれの声調のピッチ実現の変異が新情報提示や対比焦点など談話機能の実現に主として関与していることを示し、各声調形に応じ、この変異が特にどの部分に現われるかを実験音声学的な分析に基づいて提示する研究である。台湾語の各声調基本形（本調）は、語あるいは短い句を単位とする「声調グループ」内の1箇所のみ現われ、この本調音節に先行する音節では各声調の変調形、後続する音節では声調の弁別を欠く軽声が現われることから、この1箇所の本調音節を一種の語ストレスとみなし、「本調」を各声調での強勢音節の実現とみなす分析が可能であるが、対照焦点表示に関わる声調のピッチ変異は、本調であるか変調であるかに関わらず焦点部分の頭音節の変異として実現していること、また、このようなピッチの変異は、焦点に応じて声調グループ内部の任意の位置に出現することから、焦点表示に関わる音韻論的な体系（イントネーション）が、語のまとまりを示す強勢（アクセント）と、必ずしも階層的な関係にはない韻律構造をもつことが推論される。

論文は、結論を含む5章から成り、第1章で単独の発話における変調と本調の組み合わせからなる49種類の語のピッチ実現を分析した上で、第2章においては、普通話の先行研究を参照した3種類のイントネーション的な枠組み（邏輯重音・語法重音・弱化重音）を立て、これらの実現が期待される3種の文脈において、語末本調、次末本調、次末変調、語末軽声の7種の声調（軽声では先行音節の声調に条件付けられた変異形）がどのように変異して実現するかを、分節音の長さ、ピッチ（高点、低点、高低差）に注目して分析し、また、この3種の実現を母語話者が容易に弁別することが可能であることを、母語話者の談話音声の分析により示す。第4章と第5章では、普通話とも共通の、繫辞「是」の焦点マーカースとしての用法と、第2章で定義した3種の重音との相関を分析し、この用法での「是」が弱化重音で現われないことと、脱落しても邏輯重音の存在により焦点表示機能は明示されることから、「是」自体は特定の統語的位置のみ出現可能な補助的な焦点マーカースであり、対比的焦点表示を主として担うのは重音であると結論する。

韻律記述としては、イントネーションに離散的な体系を仮定する分析であり、弱化重音の位置で軽声が生じた音節と声調拡散を起ささないことなど二値的な基準が関与することをその根拠としている。介詞や代名詞のように通常は後続の語と声調グループをなし変調で現われる1音節語が、邏輯重音を伴う場合には本調で現われる現象については、邏輯重音が変調音節にも加わりうることを根拠として、邏輯重音が本調の強勢と直接結びつくのではなく、非対比的な後続部分に現われる弱化重音が生じた音節を単位とするためとする分析にも現われるように、声調グループ（「音韻語」）の構造レベルを参照しながらそのイントネーション構造との関係を記述するという韻律構造分析の手法をとる。

主題となっている韻律記述の実証的音声データにとどまらず、声調グループの構成についても母語

話者ならではの充実した記述資料を含むなど、台湾語の韻律構造記述として一般韻律理論研究の進展に寄与する個別言語記述研究であると言え、博士論文として適格であると判断する。

【最終試験の結果の要旨】

博士学位論文『文焦点と韻律－台湾閩南語を中心として－』に関して、平成 24 年 1 月 19 日に学位論文審査委員会委員全員出席による口頭試問、次いで、平成 22 年 1 月 21 日に学位論文公開発表会を実施した。

口頭試問においては、呉幸芬氏による論文要旨の口頭説明を大筋で了解した上で、補足的な説明を求めた。実験音声学的なデータの処理についていくつかの質問があり、資料音声の収集と評価、分析に用いたソフトウェアなどについて説明された。論文で用いられている用語の中国語学での定義についての質問については、中国語学・台湾語学での研究史的の観点から、問題点も含め説明された。

学位論文発表会においては、論文全体にわたる 40 分間のプレゼンテーションの後、例示された一部の資料（音声資料を含む）に関する質疑応答があった。

以上の口頭試問と学位論文公開発表会において、博士学位論文の論点はじゅうぶんに明らかにされており、合格と判断する。

【審査委員会】

主査	千島	英一
委員	福澤	清
委員	吉川	榮一
委員	児玉	望
委員	千田	俊太郎